

榎考 面白 い！ 研が

建物は平成4年5月31日竣工。天井の採光部から射し込む光が打放しコンクリートの内壁に反射して、1階から3階までの吹き抜けを均質な光で満たす。三角形の吹き抜けの一角には円筒形のエレベーターシャフト。1階は開かれた空間であり、展示やイベント、講演会も開催される

奈良県立榎原考古学研究所。通称「榎考^{エノコウ}」。高松塚も藤ノ木も飛鳥京跡も、みんな榎考研が掘った遺跡だ。日本考古学史上に燦然と輝く数々の調査研究を成し遂げてきた研究所、そのバックヤードを紹介する。

打放しコンクリートの内観に、吹き抜け自然採光のアーチ系建築。この現代的な研究棟をもつ研究所のはじまりが、バラックみたいな小屋^{（1938）}だったとは、だれが想像しよう。研究所の創設は、榎原神宮外苑整備事業に伴う発掘のため、工事事務所の一角に調査事務所を設けた昭和13年（1938）9月13日。当時の建物は、丸太を組んで板塀を張ったトタン屋根の「バラック」だったといわれる。また同時期の休憩所（もしくは道具置き場）は、まるで弥生住居を復元したような竈葺き屋根の建物だったという。

平成4年竣工の現在の研究所は、1つの建物の中で遺物整理や報告書作成作業が機能的に進むように設計されている。その研究所のバックヤードを紹介する前に、まず一度発掘現場に向かおう。考古学のはじめの一步はフィールドからスタートする。

京奈和道建設に消える遺跡を記録し、保存する

夏の発掘はきつい。太陽は容赦なく照りつけ、さえぎるものの何もない現場をじりじりと焼く。この日は逆に、雨が時折ぱらつく梅雨空。白線に挟まれた細い道状の部分は、弥生前期の水田の畔である。大雨に降られると検出した遺構の境目が流されてしまう。作業と空を睨む日が続く（御所市條、秋津遺跡）



接合中の土器片。セメダインのいいところは柔軟さ。接合をやり直す場合でも簡単にはがれ、土器に負担を掛けない。右奥にあるのは石膏を溶くゴムのお椀

土器片は語る。土器になれば饒舌になる



完成に近づく土器の復元。先が丸いアルミピンチや木の洗濯バサミは、土器の表面を傷めにくく、復元によく用いられる。手にした口縁の接合角度は、仕上がり次第でその土器の年代をも左右してしまう、気の抜けない接合だ



足らない部分を石膏で補って仕上がった復元土器。手前の口縁部分が作られていないのは、内側の観察用のため。このあと土器の色に応じて、石膏に着色する



手術用実体顕微鏡で覗きながら、辻金具（馬具）表面に盛り上がった錆を、高速回転するグラインダーで削る



発掘調査で取り上げられた遺物は、研究所に運ばれて再生へのシステムチックな流れに乗る。樫考研で1年間に増えるコンテナの量は約1600箱。そのうちいったい何箇の土器が接合され、割れる前の形に戻して貰えるのか、それは誰にもわからない「土器の運」。

約228㎡の細長い整理室には、入口から順に洗浄、マージング（注記）、破片の選別、接合という大きな流れができています。また地下の収蔵庫とは別に整理室に隣接して、新しい出土品や動きがあるものを置く収蔵庫もある。むろん保存処理の必要がある木製品や金属製品は保存科学棟へ直行し、状態確認を済ませたあとに必要な処理が施される。

あらゆる態勢が整備された樫考研。だが注記こそ機械で行うようになつたものの、土器片と向き合う作業そのものは、大きく変わってはいない。ここには愚直に真面目に毎日1つ1つの遺物と向き合っている人たちがいる。その作業が、樫考研の膨大な調査研究と博物館の展示を支えている。

増え続けるコンテナ、年間1600箱

秋津遺跡から発掘された土器片。タマネギ袋に、出土した日にちや調査区、層位を記したラベルといっしょにまとめられている。少なくとも、いま手にした一袋の土器とラベルは、このまま半永久的に一緒にコンテナで過ごすことになる。考古学は記録が命。出どころはどこまでいっても曖昧になることはない



⑨取り上げた遺物は場所や層位ごとに袋に詰め、後日研究所搬入口へ



⑥現場主任の岡田憲一さん。命綱をつけ遺構を撮影中



⑤遺跡全体を見渡す高さ約7mの橋の上に誰かが？！



⑧ベルトコンも休憩中。背後の小山は遺構からの排土の山！



⑦くつろぐ作業員さん。撮影は現場の休憩時間に行う



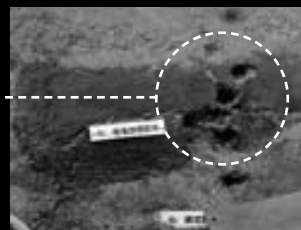
②堆積した土層の断面図を実測する学生さん



①土を掘る、掘ったら箕でベルトコンベアへ



④正解は土壌サンプルの穴(焼き芋じゃありません)



③土の壁に穴がいくつもポコポコ。その正体は？



秋津遺跡（御所市條）

カシコウケンってどんなところ？ 研究所探検隊が行く

奈良の発掘といえば「橿原考古学研究所」。研究所と聞くとカタイ印象を受けるが、いったいどんな人がどんな仕事をしているのか？研究所探検へいざ、出発！



状況を簡単にスケッチしたりする。発掘調査に関わる人たちの必携品だ。そして左肩のポケットにはカッターナイフと五寸釘！「付箋のように直接土に刺して目印にしたり、土層の重なり具合を記録に取るとき、境目がわかりやすいように釘で線を引いたりします。刺さりそうで危ないんですが」と木村さん。朝8時半から夕方4時半までは現場、その後は研究所に戻り野帳に書き込んだメモを遺構の実測

図と照合するなど1日の総括を行う。灼熱の炎天下も手がかじかむ真冬も奈良盆地での発掘はキツイが「奈良の歴史は日本の歴史に直結します。そんな遺跡を掘ることができる幸せの方が大きい」という。

「夢は都城や寺院の発掘。秋津遺跡には、洪水で流れてきた砂礫層が厚く堆積している。弥生前期の水田跡のある土層まで掘り下げ、砂層を除いてやれば、粘土質の土で



背後の土の壁には、層位の境目を釘でかじって明確にした跡が…



ガリを使って周囲と色の異なる土を削っていく



2013年度の発掘件数は47件。1年間に増えるコンテナの数は平均1600箱。現在コンテナ総数は9万5000箱。あと3年強で10万箱の大体に乗る計算だ

■実力派、発掘女子が掘る奈良県御所市條、池ノ内の秋津遺跡は、弥生時代前期の水田遺構。秋津遺跡の南東一帯には広さ1万㎡、弥生前期最大の水田跡として注目された中西遺跡があり、秋津遺跡

とつながることが予測されている。いずれも京奈和自動車道建設に伴う発掘で2009年から調査が進められてきた。秋津遺跡発掘現場の副主任、木村理恵さんは、今年の4月に入所したばかりのいわゆる

遺跡を調査・記録しています

橿原考古学研究所を支える人たち



調査課 技師 木村理恵さん

「新人」。だが、右も左もよくわかっていて新人である。「自分なりに他所で経験を積みチャンスを得た、長年憧れていた目標の場所。いまはとにかく先輩に学びながら早く一人前になりたい」と、はじめての水田遺構に取り組む。

土器が大好き。学生のころは土器の研究に明け暮れ、発掘にもどんどん参加した。

「土器はその工房の特徴まで見えてくる遺物。土器を介して古代人と対話しているような気持ちになるんです」

■現場の必需品は五寸釘？

発掘現場は一見、工事現場とよく似ている。作業服に身を包み、ヘルメットを被る。片手には「ガリ」と呼ばれる削り鎌、胸ポケットにはシャープペンと野帳。野帳とは方眼を印刷した小さなノートで、測量の数字をメモしたり遺構



曾我川沿いにある横大路の道標

蘇我氏は
悪者だったのか？
そんな想いが
脳裏をよぎる。



⑩国道 24 号のバイパスの下を通り抜けます



⑫大日堂の廂の下でひと休みしました



⑬入鹿神社です。2 年前にも一度来ましたね



⑭古い家並が残る横大路



⑮曾我川沿いの道を進みます

今日の日は
いざさらば。
ワンドラー
かよちゃん
明日は何処へ！
(フアク)

やはり帽子より
日傘が 涼しいわね～



地元の方はそれを拒みました。歴史では、蘇我入鹿が完全な悪者にされていることを潔しとしなかったでしょう。たぶん、それには理由があるはず。例えば、丹波では明智光秀が名君だったといまでも言い伝えられていることから考えると、入鹿もそんな悪人ではなかったのかも知れません。伝説にはその伝説が語り継がれる理由があると思います。歴史から消されてしまった真実が伝説のなかに残されているのかもしれない。すべては不確かで想像の域を超えることはできませんが、いつの時代か、なにかの遺跡が発掘されて、今までの歴史が塗り替えられる日が来るかもしれないのです。



④ワンコも暑さでバテバテです



⑤市杵嶋神社の額

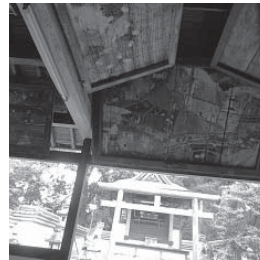
魚がいっぱい泳いでました！



②集落の中に堀が残されています



①近鉄松塚駅前の地藏堂



⑧拝殿の給馬がすごい



⑦磐余神社に入ります

中和幹線を
車がブンブン
通ります



⑥磐余神社前のいわれ橋



⑤松塚の古い町並み



⑪おっと、陰陽石でしょうか？



⑩岩神社の社殿は岩の上に建てられています



⑨神社の杜も歴史を感じさせます



⑮川近くの集落の中にある太神宮の燈籠。ここが昔の街道が通っていたようです



⑭よく手入れされたきれいな神社です



⑬宗我坐宗我部比古神社です



⑫曾我川緑地公園から、葛城山がきれいに見えました

ここに磐余があるのでしよう。またこの周辺は「スガ、ソガ」といった名前の地名があるところ。地名学者の池田先生に「スガのつく地名は、菅が生えるような湿地や」と教えていただいたので、この土地が低いことがすぐに理解できました。ここは奈良盆地の中央、かつては菅が生い茂る湿地だったのでしょう。

磐余神社の横を曾我川が流れ、近鉄真菅駅のすぐ南には宗我坐宗我部比古神社があります。神社は蘇我氏の氏祖を祀り、近郊の人たちから、「曾我さん」という愛称で古くから親しまれているそうです。その周辺の町名は曾我です。そして曾我町の隣の小綱町には入鹿神社があるので。かつてこの土地を蘇我氏が支配していたのでしょうか。または、音が似ているだけなのでしょうか。入鹿神社は祭神が蘇我入鹿です。明治時代の皇国史観により、神社の改名を迫られたそうなのですが、

